西照

西照寺寺報「さいしょう」 第39号
2019年10月10日
発行 浄土真宗本願寺派 西照寺
高岡市吉久２丁目４－40
郵便振替口座 00780-8-8185 西照寺
西照寺ホームページ http://nisitera.eek.jp

報恩講勤修

左記のとおり今年度の報恩講お勤めいたします
お参りくださいませ

おつとめの時間

十一月 六日（水） 午後二時（逮夜）～
午後七時（初夜）～
七日（木） 午前九時半（満日中）～

布教使 小島 信 師 射水市堀岡 聞光寺衆徒

※お斎（御膳）は 六日逮夜のみで七日はありません

西谷山 西照寺

葬儀のゆくえ

近年、葬儀のあり方が大きく変容してきています。家族葬、直葬（ちょくそう）（葬儀をしない火葬のみ）という言葉が違和感なく定着し、葬儀の小規模簡略化・多様化が顕著になってきました。病院で亡くなると直接葬儀社へ移送し、家は普段の様相と全く変わらず新聞の死亡欄にも掲載しない。隣の家の人が亡くなったことすら近所の人が全く知らいなという状況も、時折目にするようになりました。

平成二八年の公正取引委員会全国調査では、一般葬六三％、家族葬二八・四％、直葬五・五％、一日葬二・八％、社葬〇・三％となっています。平成二五年の関東圏でのＮＨＫ調査では、二二％が直葬であると報告されています。

今後ますます、家族葬、直葬は増え続け、僧侶を呼ばない葬儀、自由な形での葬儀など多様化が進んでいくことは、避けられない流れとなっています。

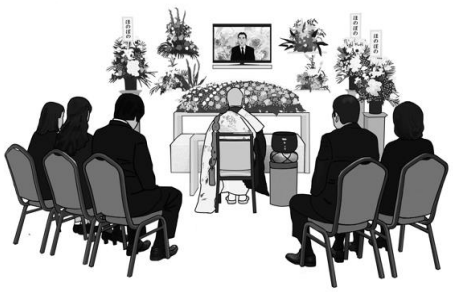
これらの現象をどのように受け止めたらよいのでしょうか。

そもそも歴史的に葬儀というのは、その時代その時代の社会状況や意識の現れであり、変化していくものである。ですから、今日の変化は、家族（並びに個人）と社会との関係性の変化が投影されたものであると言われています。

一昔前までは，三世代同居の大家族・親戚関係・地域共同体のつながりを大切にし、相互扶助の中で生活していたように思います。誰かが亡くなると、親戚や村中の人が総出になって、いろいろな役割や金銭（香典）を分担し、物心両面にわたって遺族を支援しました。各村に火葬場があったころは、その火葬の役も近所の人が分担したと聞いています。そうやって多くの人が悲嘆を共にし、つながりを深め、その大切さを確認していく場が葬儀でもあったように思います。ある意味で公な行事でした。

ところが、戦後は戦前の国家主義や全体主義への反省もあって、人類の普遍的な理念である、個人の自由と平等・人権を尊重する憲法のもとに歩みがはじまりました。別な言葉で言うと個人を尊重する「個人化社会」をめざすということなのでしょう。

「個人化とは、職業やライフスタイ



ルや人間関係や消費などのあらゆることが、社会の規範や規則といった枠組みによらずに。個人の選択の対象になったきたことを意味する」と解説されています。つまり、伝統的な習慣やしきたり、世間体、周りが当たり前のように行っていることでも、それをどうするかは個人の選択の自由（自己決定）である。その個人の選択は尊重されるべきで、結果のリスクは自己責任として負うていくことが、めざすべき自律した人間像ということなのです。

戦後の産業構造の変化や少子高齢化・核家族化は、個人化を促進し、バラバラとなった個人が漂流する時代を迎えようとしています。

一九八六（昭和六一）年と、二〇一七（平成二九）年を比較してみると、三世代同居の世帯は一五・三％から五・八％に、夫婦と子供のみの世帯（核家族）は、四一・四％から二九・五％に減少しています。その一方で単独世帯は、一八・二％から二七％に、夫婦のみの世帯は、一四・四％から二四％に増大しています。

二〇四〇年には、単身世帯が全体の四割、六五歳以上の男性二割、女性の二・五割が一人暮らし、生涯未婚率は三割と予想されています。

このような個人化の傾向は、社会通念規範などから個人を解放する一方で、地縁・血縁・宗教縁の関係性が軽視され、人間関係を希薄にし、小さくなった家族と孤立化した個々人を生み出しました。それに併せて、葬儀の小規模化簡略化が目に付くようになってきています。葬儀は社会的な相互扶助の行事から、私的な家族内行事となり、葬祭業者にすべてを任せて、お金のかかる経済行為に成りました。沢山の人が金銭(香典)を負担してくれるわけでもありませんので、小規模化せざるを得ない面があります。法事などの死者追悼儀礼も簡略化されていく。

更には、家を継承する者もいなくなっていくということから、遺骨を継承する必要のない、永代供養墓、合同墓、樹木葬、散骨などの需要も増えてきました。

このような状況は、葬儀をはじめ。法事などの死者追悼儀礼を通して、聞法への機縁を深め、門信徒との関係を繋いできた仏教各寺院にとって、その存立基盤を根底から問い直さなければならない事態に直面させられています。

世界の幸福国

さて、この個人化は日本に限られたことではなくて　（裏面続く）

（中面からの続き）世界全体がそちらの方に向かっているように思います。二〇一二年、実に国民の九七％が幸せだと意識調査で答えている、幸せの国ブータンが 国連を動かし、三月十四日を世界幸福デーに制定しました。ブータンのように経済優先ではなくて、国民一人一人を幸福にする施策を考えようということです。以来、毎年のように世界幸福度ランキングが発表されています。今年は世界一五六カ国中、一位からフィンランド、デンマーク、ノルウェー、日本は五八位、ブータンは九五位などとなっています。今までの調査では常に北欧が上位を占めています。社会福祉や保証がしっかりしているからなのでしょうか。北欧は全般にそうなのですが、特に今年の上位三か国は、すでに四割超が単身世帯です。つまり、一人で何不自由なく暮らせるのが幸せだということなのでしょうか。それが世界がめざすべき幸福の姿なのだ。個人化社会は、現代文明が生み出した必然的な方向なのかもしれません。

ですから、個人化は、嘆くことでも否定すべきことでもありません。だだ問題なのは、人間を支える共同性が弱体化し、それに伴って人間関係が希薄になってきたことです。

釈尊が気づいた命の事実

私の命は、私が作ったものではありません。

いろんなものが、仮に依り集まって私を成り立たせています。そして、一人で存在している者は誰もいません。

いろんな物や人とのつながりのなかで生かされ支えられてきた命です。生きる喜びも感動も苦難を乗り越えていく力も、そのつながりの中からたまわってき命です。そう気づいたら、つながっている相手の事を自分ことのように大切に生きていく慈悲の心こそ、私の命に宿った願いであると釈尊は教えてくださいました。

個人化の傾向は、あらゆる束縛から解放されて、人は一人になって自由なのかもしれません。しかし大切な命の事実を見失いがちになるような気がいたします。

今後、どんな葬儀や死者追悼儀礼の形式になろうとも、そのことを通して、自らの「いのち」の本質に目覚め、確認していくいとなみでありたいと思います。

（文責　住職）